

東ティモールにおけるカトリック人文主義教育の挑戦

——聖イグナチオ・デ・ロヨラ学院 Colégio de Santo Inácio de Loiola を中心に——

桑原直己

【1】はじめに

筆者は、平成 23-26 年度には研究課題名「キリスト教的人文主義教育の歴史とその現代的意義に関する研究」（基盤研究（C）課題番号 23520012）、平成 27-30 年度には研究課題名「カトリック系人文主義教育と日本－イエズス会を中心に－」（基盤研究（B）課題番号 15H03470）のもとに科学研究費の交付を受け研究を進めてきている。この研究は文献研究による思想史的研究と併行して、イエズス会学校を中心にキリスト教的人文主義教育の理念にもとづく現代の教育実践に対する調査研究をもその内容としている。今回筆者は、研究分担者である國學院大學教授夏秋英房氏（教育社会学）と共に、東ティモールのイエズス会学校聖イグナチオ・デ・ロヨラ学院 Colégio de Santo Inácio de Loiola を訪問調査した。本稿はその調査報告である。なお、今回の訪問調査にあたっては同校教諭、浦善孝神父（イエズス会）に全面的な協力を頂いた。浦師には同校の案内、宿舎の手配、滞在中のほぼ全行程における車の運転など筆舌に尽くせぬほどのお世話になっている。ここに心からの謝意を表するものである。また、筆者にとっては専門外であるフィールド調査という研究方法に関して、実地でつぶさに支え導いてくれた夏秋氏にも深く感謝する次第である。

【2】東ティモールとは*¹

東ティモール（正式名称、東ティモール民主共和国 The Democratic Republic of Timor-Leste）は日本のほぼ真南、赤道を少し越えて南半球に入ったあたりに位置するティモール島の東半分を占める島国である。面積は約 1 万 4,900 平方キロメートルで日本の首都圏 4 都県（東京、千葉、埼玉、神奈川）の合計面積とほぼ同じ大きさである。人口は約 121.2 万人（2014 年、出典：世界銀行）。首都は国の中央部北海岸にあるディリ市。住民の民族構成は、大半がテトゥン族等メラネシア系であるが、その他マレー系、中華系等、またポルトガル系を主体とする欧州人及びその混血等からなる。後述するがこの国にとって大きな問題は言語にあると考えられる。公用語は、テトゥン語及びポルトガル語。実用語に、インドネシア語及び英語。その他多数の部族語が使用されている。宗教はキリスト教徒が 99.1%（大半がカトリック）、イスラム教徒が 0.79% である。

*¹ 東ティモール全般に関する本節での紹介は日本政府外務省 HP「東ティモール民主共和国（The Democratic Republic of Timor-Leste）基礎データ」

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/easttimor/data.html>（2015/09/23）による。

この国の歴史の概略については、外務省の基礎データによる略年表（表1）を引用しておくが、さらにその要点を以下に簡単に概観しておこう。

大航海時代にまずポルトガルが征服し、その後やってきたオランダとの間で綱引きがなされ、オランダ領となった地域（＝インドネシア）とは別個の歴史とアイデンティティーを持つに至ったのがこの国の始まりであると言える。

1942年、一時日本軍がティモール全島を占領するが、1945年、第2次世界大戦終了後、西ティモールはインドネシアの一部として独立したのに対し、東ティモールはポルトガル

表1 東ティモール^{*2} 略史

年	略史
16世紀以前	リウライ（王）が割拠し、王国が分立。
16世紀前半	ポルトガル、東ティモールに白旗を求めて来航、ティモール島を征服。
17世紀半ば	オランダ、西ティモールを占領。
1701年	ポルトガル、ティモール全島を領有。
1859年	リスボン条約で、ポルトガルとオランダの間でそれぞれ東西ティモールを分割。
1942年	日本軍、ティモール全島を占領。
1945年	第2次世界大戦終了後、ポルトガルによる東ティモールの支配が回復（西ティモールはインドネシアの一部として独立）。
1974年	ポルトガル本国でクーデターが発生し、植民地の維持を強く主張した旧政権の崩壊に伴い、東ティモールで独立の動きが強まる。
1975年	独立派（フレデリン等）と反独立派の対立激化。フレデリンが東ティモールの独立を宣言した後、インドネシア軍が東ティモールに侵襲し制圧。
1976年	インドネシア政府、東ティモールを第27番目の州として併合を宣言。
1991年	11月、サンタクルス事件発生（インドネシア軍による独立派殺害事件）
1998年	5月、スリレト・インドネシア大統領が退陣、ハビビ副大統領が大統領に就任。インドネシアは、東ティモールの独立容認へ方針転換。
1999年	6月11日、国連安保理は国連東ティモール・ミッション（UNAMET）設立を決定。8月30日、独立についての直接投票が実施されたが、投票直後から、独立反対派の破壊・暴力行為が増し、現地情勢は急速に悪化。これを受けて、国連安保理は多国結軍（INTERFET）の設立を決定。10月20日、インドネシア国民協議会は東ティモールからの撤退を決定。国連安保理は国連東ティモール暫定行政機構（UNTAET）の設立を決定。
2002年	4月14日、大統領選挙実施。グスマン氏が当選。 5月17日、国連安保理は国連東ティモール支援団（UNMISSET）の設立を決定。 5月20日、東ティモール民主共和国独立。
2005年	4月28日、国連安保理は国連東ティモール事務所（UNOTIL）の設立を決定。
2006年	西部出身の国軍兵士による差別待遇改善要求のデモをきっかけに、治安が急激に悪化。15万人に上る住民が国内避難。政府の要請を受けて、豪、ポルトガル、NZ、マレーシアが国際治安部隊を派遣。国連安保理は、国連東ティモール統合ミッション（UNMIT）の設立を決定。
2007年	4月9日、大統領選挙実施（5月9日、大統領選挙決選投票実施、ラモス＝ホルタ新首相が当選）。 6月30日、国民議会選挙実施。
2008年	2月11日、ラモス＝ホルタ大統領及びグスマン首相銃撃事件発生。ラモス＝ホルタ大統領重傷を負う。 2月12日、非常事態宣言発出（5月8日、非常事態宣言解除）。
2009年	5月、UNMITから東ティモール国家警察への警察権移譲開始（2011年3月、全13県で移譲完了）。
2010年	4月7日、国づくりの基本となる中長期開発計画「戦略開発計画」（SDP）の概要を発表（2011年7月15日、正式発表）。
2011年	8月20日、政府は東ティモール国軍の前身となるグリラ組織「ファリンテル」の創設除隊式典を実施。 2月23日、国連安保理はUNMITのマンデートを2012年12月31日まで延長することを決定。 3月17日、大統領選挙実施（4月16日、大統領選挙決選投票実施、タウル・マタン・ルアク前国軍司令官が当選）
2012年	5月20日、独立10周年記念式典及び大統領就任式典 7月7日、国民議会選挙実施（グスマン首相の続投が確定） 8月8日、第5次立憲政府発足 12月31日、マンデートの終了により、UNMITの任期が満了
2013年	11月11日、グスマン首相が2015年に引退する旨表明
2014年	7月23日、ディリにてポルトガル語圏諸国共同体（CPLP）サミットを開催
2015年	2月5日、グスマン首相がルアク大統領に辞表を提出。 2月9日、ルアク大統領がグスマン首相の辞表を受理し、これを正式に発表。 2月11日、大統領府は第6次立憲政府閣僚名簿を発表。 2月16日、就任式にて、アラウジョ新首相率いる第6次立憲政府が発足。グスマン前首相は、指導大臣兼計画・戦略投資大臣として内閣に就任。

*2 ibid.

による支配に復している。

1974年、ポルトガル本国でクーデター（「カーネーション革命」）が発生し、植民地の維持を強く主張した旧政権の崩壊に伴い、東ティモールで独立の動きが強まる。1975年、フレテリン（東ティモール独立革命戦線）等の独立派と反独立派との対立が激化する中、フレテリンが東ティモールの独立を宣言した。しかしその直後、インドネシア軍が東ティモールに侵攻・制圧し、1976年にはインドネシア政府が東ティモールを第27番目の州として併合を宣言してインドネシア支配の時代に入る。

1998年5月、スハルト・インドネシア大統領が退陣して、インドネシアが東ティモールの独立容認へと方針転換したことを背景に、東ティモール独立への動きが高まり、1999年から国連の支援のもと、紆余曲折を経ながらも2002年5月20日、東ティモール民主共和国として独立を果たしている。

現在、社会はほぼ安定しているように思われるが、独立後現在にいたるまでの間における特筆すべき事件として2006年の暴動が挙げられる。西部出身の国軍兵士による差別待遇改善要求のデモをきっかけに、治安が急激に悪化。15万人に上る住民が国内避難し、政府の要請を受けて、オーストラリア、ポルトガル、ニュージーランド、マレーシアが国際治安部隊を派遣した。この事態を受けて、国連安保理は国連東ティモール統合ミッション（UNMIT）の設立を決定している。

【3】 聖イグナチオ・デ・ロヨラ学院 Colégio de Santo Inácio de Loiola について*3

（一） 概要

東ティモールの学校制度は日本と同じ6・3・3制である。したがって、差し当たり校種名についても日本と同じ呼び方を用いることとする。義務教育は第9学年（中学校）まで、という点も日本と同じである。ちなみに大学は3年制であったが、つい最近（後述する東ティモール大学工学部では2012年から）4年制に移行しているの、学年についても完全に日本と同じと考えてよい。ただし、日本では初等中等教育における学年はほぼ年齢と対応しているが、東ティモールでは学年は習熟度で決まるので、小中学校でも同じ学年に2～3年年長の生徒がいることは珍しいことではない。

今回、私たちが主として訪問調査を行ったのは、首都デイリの西方約18km、リキサ県バザールテテ郡ウルメラ村の海岸近くに位置する聖イグナチオ中学高等学校（聖イグナチオ・デ・ロヨラ学院 Colégio de Santo Inácio de Loiola）である。本校はカトリック教会の男子修道会イエズス会を設立母体とし、2013年1月に開校した。現在、中学1年生から中学3年生までの男女生徒約270名が在学している。まだ中学生しかいないが、1期生（現在の中学3年生）が学年進行にしたがって高校3年生となる2018年に完成することになる。

なお、本校に隣接する敷地に、本校と密接な連携のもと、東ティモール社会全体の教育に奉仕するための教育施設として、高等学校教員養成のための学位取得が可能な4年間の

*3 HP「Colégio de Santo Inácio de Loiola 東ティモールの新しいイエズス会学校 聖イグナチオ・デ・ロヨラ学院」http://www.jesuits.or.jp/~j_urasj/index.html（2015/09/23）による。

プログラムを提供する教員養成大学聖ジョアン・デ・ブリトー学院 (Instituto de São João de Brito) を 2014 年に設立し、約 25 名の学生の入学をもって開校する予定であったが、実質的な開校はまだなされていない。

聖イグナチオ・デ・ロヨラ学院の教員の内、イエズス会員は校長 (Director) である Sanchez 神父 (フィリピン人) と浦師との神父 2 名、そして神学生^{*4} 3 名 (ティモール人 L 氏、ポルトガル人 F 氏、日本人 M 氏) の計 5 名である。他に本校の教員ではないが、地元住民の生活改善のために働くもう 1 名のティモール人神学生 J 氏がいる。現在海岸に住んでいる村人は、稚拙な漁業しか知らないとのこと。J 氏は、村人たちが共同して漁をするなど働き方を工夫したり、収益を向上させる方法を考えたりすることによって、彼らの生活を改善させるべく働いていると言う。Sanchez 師はデシリ市内に在住し、ウルメラ村に滞在するのは週に 2～3 日ということなので、ウルメラ村に常駐する浦師は学校では校長代理、そして修道院の院長を務めている。

(二) ウルメラ・プロジェクト

東ティモールは全体として貧しい国であるが、その中でも平野があって比較的豊かな東部と、山岳地帯に覆われた西部との間には格差があるという。上述 2006 年の暴動にはこうした東西の格差が背景となっていたのかもしれない。東部と西部という区分で言うなら、首都のデシリ市は東部の西端にあたり、本校のあるウルメラ村はデシリからわずか 18km の距離にありながら西部の貧しい村ということになる。聖イグナチオ・デ・ロヨラ学院では、「ウルメラ・プロジェクト」と称し、全校挙げてこの貧しいウルメラ村の子どもたちを本校に迎え入れることに力を尽くしている。以下に、日本国内の支援者に向けて浦師自身が語るところを引用する。

本校はかねてから、学校所在地のウルメラ村の子どもたちを入学させることも大きな目的の一つにしています。現在在校生の約 10% がウルメラ村の生徒です。その他の生徒は、リキサ県の県庁所在地であるリキサの町 (15%) と首都デシリ (75%) から通ってきています。ウルメラ村 (首都デシリの西約 18km に位置する) からの生徒が少ないのは、村が半農半漁の寒村なので家庭が生徒の学費を払うことができない、村の公立学校の教育レベルが低い、親の教育に対する関心が低い、など様々な理由が考えられています。そこで今年 (2015 年) から「ウルメラ・プロジェクト」をはじめました。村の子どもたちのための進学塾です。ウルメラ・プロジェクトの第 1 の目的は、聖イグナチオ学院に入学を希望する生徒たちが「入学試験に合格するように」入学を希望する生徒たちに本校で直接入試対策の授業を無料で行うことです (おやつ付き!)。月曜日から金曜日まで、毎日 1 時間半。土曜日は 5 時間、やってきます。村の公立学校の生徒たちが 20 名ほどやって来て、聖イグナチオ学院の先生たちからポルトガル語と算数の授業を受けます。9 月下旬に入学試験があるのでその準備です。また合格しても、来年の 1 月の新年度開始まで通い続けます。第 2 の目的は、経済的

^{*4} 正確には、イエズス会の養成期間のうちで哲学の修学期間を終えた後、神学の修学期間に入る前の 2 年間を実習的に過ごす「中間期生」と呼ばれる時期にある人たちである。

な理由で授業料が払えず入学できない子どもたちに奨学金を支給することです。この奨学金はこの HP でご協力をお願いしている「聖イグナチオ学院基金」より支給することになっています*⁵。

【4】 今回の訪問調査旅行の概要

まず、今回の訪問調査旅行における筆者たちによる行動の軌跡を時系列に従い概観する。

2015年9月9日深夜から10日になったばかりの0:05に羽田発、シンガポール経由で10日14時過ぎにディリに到着。入国手続き後浦師と合流し、宿舎となる教員住宅の一棟にて旅装を解く。以後14日までこの宿舎に宿泊する。宿舎で朝食をとった後、神学生たちの迎えのトラックで学校に赴き、昼食は学校および出先で浦師と共にとり、夕食は浦師の車で修道院でとるのが基本日課となる。浦師や神学生たちとは修道院での食事の前後、また一部の神学生や Sanchez 校長とは学校での立ち話がインタビューの場となった。

9月11日が主要な学校参観日となる。学校では、8時から自習・特別活動の時間だが、植木や植物に水やりをする生徒が多かった。1時間目は方々の授業を廊下から見学した。その後、主として浦師の教育活動を参観する。浦師は10時頃から図書館で実質司書的な仕事もされている。そこで本校の教科書類、および過日筑波大学図書館の不要図書から寄贈した図書を見せて貰う。浦師による2年生の宗教の授業を参観した後、11時15分ぐらいから、浦師が上述「ウルメラ・プロジェクト」による小学生への補習授業を指導するところを見学した。

9月12日には、教員室にて教員会議の様子を傍聴した後、全校ミサに参加。その後、浦師の車で峠を越えて隣県のライラコ (Railaco) 村に向かう。ライラコでは村の教会、そしてやはりイエズス会が運営するファティマの聖母高等学校を見学。食事後、ライラコのイエズス会共同体の地域に対する奉仕活動に同行し見学する。今回我々が同行したのは山の尾根にあるココアという集落である。この奉仕活動は、医師でもあるイエズス会員 Bong 神父 (フィリピン人) の巡回診療から出発したものであり、栄養を与えることが健康と自立のための前提条件であるという Bong 師の考え方にもとづき、老人や子どもたち (就学前の幼児のみ) に食事を配ることを内容としている。帰途、刑務所に立ち寄り訪問した。現在収容されている受刑者は103名、内男性79名、女性24名。内部に、チャペル、職業訓練施設 (木工・ミシン)、教室があり、刑務所全体が受刑者が社会的に自立できるようにするための一種の教育施設である印象をもつ。

9月13日は、日曜日のミサに参列する。海岸のチャペルにて、聖イグナチオ・デ・ロヨラ学院校長の Sanchez 師が司式。普段は貧しいであろう人々が正装しており、女性の中にはドレスを着ている人もいる。夕刻、浦師と3人で海岸の集落を散策・見学する。

9月14日は聖イグナチオ・デ・ロヨラ学院訪問の最終日。全校朝礼で我々が紹介されて簡単なスピーチを行い、記念に生徒代表から手織のタイス*⁶を受ける。出発前にちよ

*⁵ 前掲 HP 「Colégio de Santo Inácio de Loiola 東ティモールの新しいイエズス会学校 聖イグナチオ・デ・ロヨラ学院」 http://www.jesuits.or.jp/~j_urasj/index.html (2015/09/23)。

うどこの時期行われている入学願書の受付状況を見る。「ウルメラ・プロジェクト」のお陰か、この日だけでも6～7名、ウルメラ村からの受験者がいたことを認める。

聖イグナチオ・デ・ロヨラ学院を後にして浦師の車で高原地帯の町マウビス (Maubisse) に向かう。デイリで本校でパソコンを整備するボランティア (システムエンジニアの役を奉仕する) 太田陸氏と合流。宿泊したホテル Pausada de Maubisse はポルトガル植民地時代、ポルトガル人の官吏が巡回する宿舎だった建物で、ちょっとした宮殿である。ただし、ほとんど知られていないので客があまりいないようで観光資源としてはもったいない。

9月15日、マウビス来訪の主目的である Leublora Green School を訪問。この施設は独立運動の闘士であった Bella Galhos 女史の創立になる、子どもたちに農場体験をさせるための「エコ・スクール」で、宿泊施設も備えている。本年5月に創設されたばかりで、夏秋氏が日本国内で情報を得ての訪問。浦師も関心を持って共に見学に及んだ次第である。Leublora Green School 見学後デイリに戻り、夏秋氏と筆者は市内のホテル・ティモールにチェックイン。以後同ホテルに2泊する。

9月16日午前、デイリ大司教区事務所を訪問する。「飛び込み」であったにもかかわらず、対応してくれた Jovito Rego 神父が親切に教区の教育担当者である Guilhermino 神父とコンタクトをとってくれ、さらには Guilhermino 師が滞在中のデイリ市東郊外ベコラの学校まで Jovito Rego 師自らが車で送ってくれる。Guilhermino 師との会見後、師の案内によりベコラの学校を見学する。この学校は幼稚園から高校までを備えた唯一の学校とのことである。その後、教区の教育関係の事務所に案内され、デイリ教区の教育関係のスタッフたちからも取材の機会を得た。

16日午後は、東ティモール独立にいたるまでの苦闘の歴史について展示した博物館 Resistencia Timorese Arkivu & Muzeu を見学、残った時間デイリ市中心部を散策してホテルに戻る。

9月17日午前、タクシーでデイリから峠一つ越えたヘラ (Hera) にある東ティモール国立大学工学部キャンパスを訪れ、東ティモール国立大学工学部能力向上プロジェクトのチーフアドバイザー風間秀彦博士 (埼玉大学名誉教授)、JICA^{*7}の高橋敦氏を訪ねる。両氏と会見後、東ティモール国立大学工学部のキャンパスを見学し、デイリに戻る。

デイリで浦師と再び合流、最後の昼食を共にして空港に向かい帰国の途につく。

以上、やや冗長となることを顧みず、今回の訪問調査旅行の軌跡を時系列に従い概観してきた。以下に今回の調査から見えてきたこの国の教育について、筆者なりの考察に関連するやや立ち入った報告に入るが、問題点を浮き彫りにするために敢えて時系列を逆転し、東ティモール国立大学工学部での風間博士らとの会見、デイリ司教区における Guilhermino 師との会見のエピソードから始めて、最後に聖イグナチオ・デ・ロヨラ学院に戻る形で展開したい。

^{*6} 東ティモールで客人を歓迎し敬意を表する場合に贈呈する一種のストール。各地方で独自の柄や色使いがあるという。

^{*7} 日本の独立行政法人国際協力機構 (Japan International Cooperation Agency) の略称。

【5】 高等教育の現場から見た東ティモールの問題点

(一) 東ティモール国立大学工学部能力向上プロジェクト

先述のとおり、17日に私たちは東ティモール国立大学工学部キャンパスを訪れ、東ティモール国立大学工学部能力向上プロジェクトのチーフアドバイザーである風間秀彦博士（埼玉大学名誉教授）、プロジェクトコーディネーターの高橋敦氏（JICA）を訪ねた。両氏は私たちに資料を配付の上、「東ティモール国立大学工学部能力向上（CADEFEST）プロジェクト」に関して要を得た説明をしてくれた。

まず、JICAによる東ティモール大学工学部支援の経緯は以下の通りである。

2001年、第一回調査団派遣

緊急無償援助

2003年 第二回調査団派遣

個別専門家派遣

2005年1月 技術協力協定締結

2006年5月以降の内戦によるプロジェクト中断。

2007年8月にプロジェクト再開、2010年まで、第一次 CADEFEST プロジェクト

2011年より2015年まで、第二次 CADEFEST プロジェクト

2015年での第二次プロジェクト終結を控え、現在新プロジェクトの準備中

第一次^{*8}、第二次^{*9}のプロジェクトの内容（目標と活動）についてはJICAのHPにもある程度の説明がなされているので参照されたい。HPの情報にさらに補足するならば、学部および学科によりそれぞれ異なった国が支援にあたっている。東ティモール国立大学工学部は、機械工学科、土木工学科、電気電子工学科、情報工学科、地質石油学科の5学科からなる。このうち、第二次プロジェクトでは機械工学科（支援大学：長岡技術科学大学）、土木工学科（支援大学：山口大学）、電気電子工学科（支援大学：岐阜大学）の3学科を日本が支援している。情報工学科、地質石油学科はポルトガルが支援していたが、2012年に撤退した、と言う。

(二) < 1/2+1/3=1/5 >

風間氏は2003年よりプロジェクトに参加されているので、第一次、第二次の両プロジェクトを通して関与されている。第一次プロジェクトの課題は端的に教官のレベルアップであったが、この課題は基本的には第二次プロジェクトにおいても継続している、と言う。第一次プロジェクトの紹介HPによれば^{*10}

東ティモール大学工学部は、東ティモール国内では唯一の公的高等技術教育機関であり、現時点で国内最高の工学系教育機関であるにも関わらず、教官のレベルは著しく低く、多くの者は中等教育レベルの数学や物理、英語の能力も身につけておらず、ま

^{*8} <http://www.jica.go.jp/project/easttimor/0601585/01/index.html> (2015/09/23)

^{*9} <http://www.jica.go.jp/project/easttimor/002/outline/index.html> (2015/09/23)

^{*10} 前掲註6のHP参照。

た、指導計画に基づいた形式の確立した授業を行う等の、基礎的指導力も教官に望めない状況である。

衝撃的な事例を知った。工学部の教員の中に $\langle 1/2 + 1/3 = 1/5 \rangle$ と答える人がおり、しかも自分は学校で先生にそう教わったと言っているとのことである。理系の最高学府に通分の概念を理解していない教員がいるという事実もさることながら、「自分は学校で先生にそう教わった」と言っているということは、このことが中等教育はおろか初等教育にまで欠落があったことの結果であることを示唆している。

風間、高橋両氏による説明資料には「プロジェクトの成果と課題」と題して直面する問題点が整理されていた。そのうち「東ティモール特有の課題」には高等教育への支援という観点からこの国の教育が抱える問題点が的確にまとめられている。以下に引用する。

◎ 言語政策

- ・公用語はポルトガル語とテトゥン語、実用語はインドネシア語、テトゥン語、英語である。
- ・UNTL^{*11} はポルトガル語の使用を推進し、教育・公文書などはポルトガル語の使用を義務づけている。
- ・教官、学生ともポルトガル語が理解できる人が少ない。

◎ 初等・中等教育の強化

- ・全般に基礎学力が劣っており、特に理数科目の強化が必須。
- ・教育環境と人材の整備（教科書、教室、2部制授業、実験機材など）

◎ 教育省による閉鎖的な入学試験と合格者選定

- ・UNTL は入試制度と合格判定基準が確立されていない。
- ・教育省による一律試験で合否と配属学科を決定
- ・学科定員 50 名を大幅に超えた入学者数であったり、学力レベルの異なる学生が入学する。

教育行政のあり方に関する第3のポイントは別として、わずか1週間とは言えこの国の初等・中等教育について見聞してきた私たちには、第1の「言語政策」、第2の「初等・中等教育」に関しての指摘には頷くところが大きかった。

【6】 ディリ大司教区 Guilhermino 神父（教区における教育担当者）との会見

ローマ・カトリック教会は伝統的に属地主義的な組織である。司教が司牧する司教区（単に「教区」とも言う）、その下位にある小教区（普通「〇〇（地名）教会」と言えばこの小教区のことを指す）という形で組織化されているのが「教会」である。他方、修道会はこの属地主義的な教会組織の枠組みからは自由に活動するいわば「遊撃隊」のような組織である。日本では大学を含めカトリック系の学校はほとんどすべて修道会を母体としている^{*12}。しかしこれは日本の特殊事情であり、多くの国では「カトリック学校」と言えば教区（教会）による学校と修道会による学校との両者が存在する。現在、東ティモ

*11 東ティモール国立大学の略称。

ルにおけるカトリック教会の司教区としては、ディリと東部のバウカウ、そして2010年1月30日にディリ大司教区から分かれて新設された西部のマリアナ司教区の3司教区がある。私たちが主として訪問調査の対象としてきた聖イグナチオ・デ・ロヨラ学院、ライラコファティマの聖母高等学校はイエズス会という修道会を母体とする学校である。また、ウルメラは地域的にはマリアナ司教区に属する。

私たちがディリの大司教区事務所を訪れたのは、東ティモールにおけるカトリック学校についての全体像について見通しを得るためであった。何と言ってもディリ大司教区は東ティモール最大の司教区であり、東ティモール全国の状況についても見通せると考えたからである。今回、突然の申込みにもかかわらず親切に対応してくれた Guilhermino 神父はディリ大司教区全体のカトリック学校の director である。

まず、東ティモールにおけるカトリック学校についての数字的データを教えて頂いた。東ティモール全土に88校のカトリック学校があり、ディリ大司教区内には56校、うち教区立が37校、修道会の学校が19校とのことであった。ちなみに聖イグナチオ・デ・ロヨラ学院はマリアナ司教区に属するため、この19校の中には入っていない。

カトリック学校のカリキュラムにおいて、政府系の科目の比率は75%、カトリック校オリジナルの科目が25%とのこと。オリジナル科目は、教会史、カウンセリング、人格主義的心理学 (personal understanding) からなると言う。教会史を別とすれば、日本における公民科「倫理」の内容が連想される。ただし、カウンセリングはつい近年まで血なまぐさい歴史を経験してきた人々にとって、いわば国民レベルでの PTSD からの癒やしの意味もあるようである。なお、世俗化の進んだ国とは異なり、宗教教育は週に2時間、公立学校でも行われている。プロテスタントであってもクリスチャンであればカトリックと一緒に学ぶが、ムスリムのためには別個の授業が用意されているそうである。

公立学校とカトリック学校との比較が話題となった。多くの途上国に共通して言えることであるが、公立学校は無償であるのに対して、カトリック学校は私立学校であるため授業料を徴収しなければ成り立たない。そのため、一定以上の収入のある社会的階層の子どもしか受け入れられないところに悩みがある。しかし、カトリック校にはいくつかのメリットがある。規律正しいこと等々の点が挙げられるが、最大のメリットは授業時間数であろう。上述 UNTL でのインタビューでも初等・中等教育における「2部制授業」の問題性が指摘されていた。公立学校では授業は午前中のみと午後のみそれぞれ3時間で終わってしまう。これが「2部制授業」であり、授業時間数が絶対的に不足する。これに対してカトリック学校では8時から午後2時まで、6時間学ぶことができる。さらには特別活動で子どもたちは5時頃まで学校にいる。親は安心して子どもたちを預けられ、また実質的な教育ができるのである。

Guilhermino 師は、カトリック学校が抱える問題点として、(1) 教員の問題、(2) 建物などのインフラが間に合わないことの2点を挙げていた。このうちの (1) の問題とは、より具体的には、教員が使えるのはテトゥン語のみで、ポルトガル語、英語が話せない、という問題であった。これはまさに UNTL でも繰り返されて指摘されていた問題であった。

*12 たとえば上智大学 (イエズス会)、南山大学 (神言会)。日本で唯一の教区立大学であった英知大学 (後に「聖トマス大学」と改称) は残念ながら姿を消してしまった。

政府の言語教育政策については、Guilhermino 師もさらに多くを語っておられたが、そろそろこの問題について主題的に論じる節を立てるべき段階にきたと思われる。

【7】 言語の問題

何度も繰り返すが、東ティモールにおいて実用語はテトゥン語、英語、インドネシア語であるが、公用語はポルトガル語とテトゥン語である。高等教育の場（UNTL）においても、初等・中等教育の現場においても、ポルトガル語が理解できる教員が少ないにもかかわらず、政府は国策としてポルトガル語の使用を推進し、教育の場や公文書などではポルトガル語の使用を義務づけている。この言語政策の問題性については、聖イグナチオ・デ・ロヨラ学院でも繰り返し話題とされていた。

政府がポルトガル語にこだわる理由は歴史的・政治的な背景によるものと考えられる。東ティモールのアイデンティティーはインドネシアの圧政からの解放を原点としており、そのため、ナショナリズムとして敢えてテトゥン語とポルトガル語を公用語とする、という事情は *Rezistensia Timorese Arkivu & Muzeu* での歴史の展示を見学すれば理解できる。

しかし、一定の年齢、具体的には現在 30 代から 40 代にかけての、ちょうどティモール人神学生たちや中堅教員たちの世代の人々はインドネシア統治時代に育っているために、インドネシア語の方が親しみがあるらしい。さらには、東ティモールではある程度以上の収入のある家庭ではパラボラアンテナを立てて衛星放送のテレビを視聴しているが、インドネシアの放送、さらにはオーストラリアからの英語の放送を受信している、という。

国際的な通用性という意味では英語が有力な筈である。現実には英語がグローバルな言語であることは否定しがたい。たとえばタガログ語と英語との組み合わせによるフィリピンのような言語政策であれば、社会の発展は容易であるように見える。実際、東ティモールの若者たちは英語教育を受けたがっており、都会では日曜日に英語学校（つまり塾）に通っている者が多いという。しかし、東ティモール政府は英語に対して積極的ではないように見える。それはおそらく、1975 年に侵攻してきたインドネシアのスハルト政権の背後にキッシンジャーのアメリカがいたこと^{*13}、あるいは石油の利権をめぐるオーストラリアと微妙な関係にあることなどが影響しているのかもしれない。

しかしながら、東ティモール政府も実用語として機能している英語、インドネシア語を無視することは出来ないようである。東ティモール政府による最新の言語教育政策は次の通りだとのことである^{*14}。幼稚園はテトゥン語。小学校も 3 年生まではテトゥン語。小学校 4 年生からポルトガル語教育が始まる。中学校 1 年生から英語が加わる。さらに高校ではインドネシア語が加わる。

聖イグナチオ・デ・ロヨラ学院は現在中学校のみであるので、テトゥン語、ポルトガル語、そして英語の授業がある。しかし、語学教育には週に 3 時間ないしは 5 時間が要求されるという。中学生に 3 ヶ国語の語学教育はかなりの負担であり、カリキュラムのかなりの比重を語学教育が占めざるを得なくなる。理科、数学も存在するが、結局時間配分の上

^{*13} 歴史博物館のカタログ、*Rezistensia Timorese Arkivu & Muzeu*, Dili, 2014, pp.34-37.

^{*14} この情報は Guilhermino 師からのインタビューによる。

で語学教育に圧迫されている印象がある。さらに、理科、数学は抽象的な概念を扱うため、素朴な言語であるテトゥン語では対応が難しく、ポルトガル語が用いられる（テトゥン語で説明するにしても少なくとも板書はポルトガル語）とのことである。UNTLで指摘されていた初等・中等教育における理数科目の基礎学力不足はこうした点に起因しているように思われる。

聖イグナチオ・デ・ロヨラ学院の1期生は、来年度から学年進行により高校生となるが、インドネシア語教育も始まることになる。何と4カ国語を学ぶのである。東ティモールの高校生には誰もがマルチリンガルの天才であることが要求されるのであろうか。

16世紀末の日本にカトリック人文主義教育を導入したイエズス会東インド巡察師ヴァリニャーノ神父は、ギリシア語とラテン語の言語訓練を徹底的に行ってきたヨーロッパにおける人文主義教育の方式を絶対化することなく、ギリシア語は断念して日本語教育に置き換える英断を果たした*¹⁵。当時はいわゆる自然科学革命以前であり、言語訓練に大きな比重を傾けていた人文主義教育の時代であったにもかかわらず、である。聖イグナチオ・デ・ロヨラ学院も設立前は英語で教育を行なうことを計画していたと言う。しかし、自らの判断で政府のカリキュラムに従うことに変更決定したとのことである。その一つの理由は、中学・高校の卒業資格国家試験がポルトガル語で実施されるためと聞く。現代のヴァリニャーノたちは、国家による言語教育政策を配慮しないわけにはゆかない。

【8】 再び聖イグナチオ・デ・ロヨラ学院より

（一） ウルメラ・プロジェクトの教室より—その1

帰国してから、夏秋氏と共に無事帰国の挨拶やお礼のメールなどのやりとりをしている中で、浦師からのメールに以下のような言葉があった。

＞今日も数人の小学6年生がポルトガル語で規則変化の“amar”を変化させることができず、基本中の基本の変化なのに、と驚いているところです。

筆者には「ウルメラ・プロジェクト」による小学生への補習授業の教室を11日に見せて頂いた記憶がまだありありと残っている。そこで浦師が先生として経験している困難を想像しながら、語学教育というものについて筆者なりに考えをめぐらしてみた。

母国語の場合（たとえば私たちがかつて「国文法」を習った時）には、日常生活での言語使用という膨大な経験の基盤が土台となっている。子どもが文法的な誤りをおかせば、大人（親・教師など）や仲間たちが感覚的に「おかしい」と感じて指摘し、正されてゆく。このように、母国語の場合、言語はいわゆる「生世界」(Lebenswelt)と直結しているため、「文法」の授業はすでにほとんど無意識的・感覚的に身につけている言語の使用法を整理

*¹⁵ 16世紀末、いわゆる「キリシタン時代」の日本におけるヴァリニャーノの教育方針については以下を参照。

拙稿「キリシタン時代における日本のイエズス会学校教育」(筑波大学哲学・思想学系『哲学・思想論集』第34号、2009年、横書き部 p.1-15。

して法則性を発見してゆくだけのものである。

外国語教育の場合、効率性の観点から文法的知識を先行して教えてゆく傾向が現れてくる。それでも、長期間にわたり週当たり多くの時間がとれるのであれば、生世界、日常生活での言語使用の場面と架橋する形での教育を工夫することが可能となる。たとえば日本のイエズス会学校での英語教育では、そうした工夫がよくなされているのではないかと思われる。筆者が栄光学園の生徒であった時代^{*16}にも、「リーダー」だけではなく「英作文」にも力を入れていたように記憶している。筆者よりも後の世代のイエズス会学校で作られた『*Progress in English*』という英語の教科書には定評があり、広く一般の進学校でも用いられているそうである。聖イグナチオ・デ・ロヨラ学院で用いるポルトガル語の教科書は『*Progress in English*』を模して作られたポルトガル語版であると聞いている。

日本で西洋の古典語（ギリシア語、ラテン語）の学習となると、完全に文法書から入る。第二バチカン公会議前の神学生たちにとっては、ある程度（少なくとも教室の中で）ラテン語が会話の言語として機能していたようであるが、現在日本でラテン語やギリシア語を学ぶ学生は、完全に古典文献を「読む」ためにそれらの言語を学ぶ。筆者自身、学生としても、また初等文法を教える（数年前まで）教師としても、規則動詞“amo”（不定法は“amare”、「愛する」の意）の変化から始めたものである。

想像するに、浦師が教えている小学生にとって、ポルトガル語で規則変化の“amar”の変化を覚えることは、日本でラテン語の初学者である大学生が規則動詞“amo”の変化を覚えようとしているのと似た場面のように思えた。日本の大学生たちには、ラテン語の文法書で変化表を覚えようとするためには、アウグスティヌスやトマスやローマの古典文学を読むようになるため、という動機がある。そこに、非常に特殊で限定的な形ではあるが、一種の生世界との接点があるわけである。東ティモールの小学生たちにも何らかの形で生世界との接点があれば救いになるのではないか。そう思い、浦師には

>東ティモールの小学生たちにも、ポルトガル語が読めたり、書けたりすることが喜びとなるような場面を身近に思い浮かべられるとよいと思うのですが。

と返信したが、筆者には果たして子どもたちは生世界との接点を見出すことができるのか確信がない。できることを祈るのみである。以上の状況については、たとえば外国語教育（日本では圧倒的に英語教育であるが）の専門家に意見を仰ぐならば、あるいは有効な処方箋が得られるかも知れない。

（二）聴覚に生きる人々

聖イグナチオ・デ・ロヨラ学院の生徒たちは人なつこい。特に男の子たちは「こんにちわ」「お元気ですか」と日本語で話しかけてくる。それも発音がとてもいい。夏秋氏と「暖かい地方は母音が強い点で共通だからなのだろう」などと話し合っていたが、11日の夜に神学生たちと話したところ興味深い事実を知った。生徒たちは音楽に特別な才能があ

^{*16} 日本国内には六甲学院、栄光学園、広島学院、上智福岡（創立順）という4校のイエズス会中学高等学校があり、筆者は栄光学園の21期生である。ちなみに間もなく栄光学園は70期生を迎えると聞く。

るのだという。耳で聞き覚えて歌い、楽器（鍵盤楽器やギター）まで演奏するのだが、ただしそれは楽譜というものを介さないでのことなのだそうである。日本でギターを覚える者はまず最初に「コード」をどう押さえるかで悩むものだが、東ティモールの子どもたちは感覚的に的確な左手の動きをするらしい。考えてみればこの国にはテレビや新聞はほとんど普及していない。先述したとおり、一定以上の生活水準の家庭には衛星放送を視聴する設備がある。しかし一般に普及したマスコミと言えばラジオである。つまり、この国の人々は「聴覚の文化」を生活しているのである。

音声とは一回的な現象である。聴覚による記号は一度響いたら消えてしまい、あとは聞いた者の記憶が残るのみである。これに対して、文字や楽譜のような「書かれた記号」は時間と空間を超えてゆく。時間に関して言えば、一度書かれた記号は何度でもこれを読む者にその意味を再現させることができる。空間に関して言えば、手紙や書物のように遠く隔たった人にも意味を伝えることができる。つまり、文字などの「書かれた記号」は時間的、空間的に普遍的な拡がりをもった世界に人間がアクセスするやすがとなる。

教科書を用い、文字文化を導入する学校教育は、本質的に視覚的な「書かれた記号」の世界に属するものである。もしも、東ティモールの人々が「聴覚の世界に生きる人々」であるという筆者の直感が正しいとするならば、まず、視覚的な「書かれた記号」の世界そのものが彼らにとっては新しい世界であり、そこには一種のカルチュラル・ショックのようなものがあるのかもしれない。先述のとおり、抽象的な概念を教える数学や理科は現地の言語であるテトゥン語ではなく、どうしてもポルトガル語によらなければならないと言う。テトゥン語はきわめて具体的な言語で、「とても綺麗」ではなくて「綺麗、綺麗」と言い、動詞には時制がなくて「昨日来る」「今来る」「明日来る」といった具合に時間を表現するそうである。また、テトゥン語には未だ統一的な表記法が定まっておらず、学習する際に浦師は随分と苦勞されたと言う。このことは、テトゥン語が本来文字言語ではなく、会話の言語であることを示唆しているように思われる。そして、抽象概念に馴染みにくいというその特徴はそのことに起因しているのではなからうか。

(三) ウルメラ・プロジェクトの教室よりーその2

ここで筆者は再び「ウルメラ・プロジェクト」による浦師の小学生への補習授業の場面を思い出す。浦師は一人の少女がいつも隣の友達から答えを聞いてばかりいることに気づき、その子だけ引き離して先生の脇にある離れた席に置くことにした。ところが、そうした途端に彼女は驚くほど学習内容を理解していなかったことが露呈したと言う。11日の補習授業では、算数では引き算の「繰り下がり」で躓いている子が多かった。字が汚いため、位を揃えることにまで注意が回らないことが大きな原因であることは、私たちの目にも明らかであった。しかし問題の少女の躓きはレベルが違っていた。浦師によれば、彼女はそもそも「 $2 - 1 = 1$ 」さえも理解できていなかったとのことである。

筆者も11日の補習授業でその少女を見ている。年齢は14歳くらいであろうか（先述したとおり、この国は年齢学年制ではないので、学年標準年齢よりも2～3年年長の子がいるのは当たり前のことである）。教会の侍者のつとめは完璧にこなすことができるとのことである。「侍者」とはミサの際に司式司祭の助手役をつとめる少年（第二バチカン公会議後は少女も^{*17}）を言う。司祭の動きを適時に補助するために、ミサの複雑な手順を熟

知していることが求められる。この少女はこれを問題なくこなす能力はあるのである。

このことをある神学生に話したところ、子どもたちの中にはたとえば「 $2 - 1 = 1$ 」ということがらそのものを理解するのではなく、「 $2 - 1 = 1$ 」という「フレーズ」（日本語で言えば「に ひく いち は いち」）を暗記している子がいるとも聞いた。

夏秋氏は、こうした問題に対処するための一つの協力の可能性として、日本の小学生が使っている「算数セット」を活用してはどうかと考えておられる。このアイデアが現実になれば、日本で子どもが大きくなって不要となった「算数セット」を集めて東ティモールに送る、という支援運動に発展する可能性がある。

理科や数学は、J・ピアジェによる発達段階理論によれば「形式的操作」の段階にあることを前提とする。しかし、「形式的操作」の段階に入るためには、それ以前の「具体的操作」についての経験（記憶）を数多く蓄積している必要があるだろう。しかし「フレーズ」を暗記しているというのであれば、具体的操作の経験にも入っていないことになる。「算数セット」の活用は有効ではないかと筆者も考える。

ここでさらに、(二)節での気づきを展開させて考えるならば、やはり「聴覚の文化」から「書かれた視覚記号の文化」への文化適応の必要があるように思われる。「具体的操作」から「形式的操作」への離陸の前提となるだけの経験の蓄積のためには、文字記号の普遍性への拡がり也不可欠な補助手段となるだろうからである。ただし、そのためには子どもたちが馴染みやすく、使いこなせるような視覚記号が与えられなければならない。現時点で、東ティモールの中学生を理科や数学という形式的操作の世界に連れ出してゆく手引きとなっているのはポルトガル語である。進むべき道は東ティモール政府の政策どおりポルトガル語教育の充実にあるのか、あるいは英語なのか、さらにはテトゥン語を洗練させてゆくこと^{*18}なのだろうか。

ここでも素人である筆者として考えられることは以上が限界である。認知心理学や発達心理学の専門家、あるいは、たとえば個人レベルで言語発達に躓きを示す発達障害児に対する教育に通じた専門家の意見を仰ぐならば、有効な処方箋が得られるかも知れない。

【9】 結語

最後に、東ティモールという国における教育の現状と、その中でのカトリック学校、特に私たちが訪問調査した聖イグナチオ・デ・ロヨラ学院の位置づけについて概観したい。

UNTLにおいて風間博士、高橋氏からは、国の教育における問題としては、教育行政に関わる問題を除けば、初等・中等教育の問題と言語政策の問題の2点が指摘されていた。

東ティモールにおける実用語はインドネシア語、テトゥン語、英語であるにもかかわらず

*17 かつて「侍祭」と呼ばれる下級聖職者とされていた時代もあったため、第二バチカン公会議以前は男子に限られていたが、公会議後は女子もつとめるようになった。

*18 先述のとおり、テトゥン語には統一した表記法が確立しておらず、政府による方式、教会テトゥン語、その他にも種々の表記法が別個に存在しているとのことであるが、注目すべきことにUNTLの中に独自の方式を開発している学部があると聞いた。ことによると、テトゥン語を洗練させてアカデミック・テトゥン語のような言語を開発することを考えているのかもしれない。

ず、政府や UNTL は公用語としてのポルトガル語の使用を推進しようとしているが、教官、学生ともポルトガル語が理解できる人が少ない、という言語政策の問題は、私たちが出会ったすべての関係者が口を揃えて指摘するこの国の教育における最大問題である。この問題については当面政府の政策を受け入れる他はなく、教育現場にとっての十字架であり続けるであろう。さらには、語学教育への過大な負担、負担の割に成果が上がらない現実が、基礎学力の不足、特に理数科目へのしわ寄せとなっているように思われる。

こうした困難を孕んだ東ティモールにおける教育の現実の中で、カトリック学校、そして特に今回訪問した聖イグナチオ・デ・ロヨラ学院はどのように位置づくのか。

初等・中等教育の問題として風間博士らが指摘していた諸点のうち、教科書、教室、設備などといったインフラの整備については、Guilhermino 師も困難を指摘しておられた。しかし、カトリック学校は少なくとも「2 部制授業」の問題性についてはクリアしており、実質的な教育ができる環境を確保している。今後、カトリック学校は基礎学力を備えた生徒たちを輩出し、彼らがこの国の未来を支えうる力となってゆくことが期待される。ただし、カトリック学校は私立学校であるため、一定以上の所得がある社会的階層からしか生徒を受け入れにくいという限界がある。

ここで、聖イグナチオ・デ・ロヨラ学院は「ウルメラ・プロジェクト」により、カトリック学校が直面するこの限界、すなわち「家庭が生徒の学費を払うことができない、村の公立学校の教育レベルが低い」*¹⁹ という壁に挑戦しようとしている点に注目したい。先にカトリックの世界では修道会は属地主義的な教会組織から自由な「遊撃隊」とでも言うべき組織であることに触れた。修道会、特にイエズス会という修道会の特徴は「多国籍」という点にある。聖イグナチオ・デ・ロヨラ学院のイエズス会教師団はフィリピン人の校長、日本人の院長と神学生、ポルトガル人とティモール人の神学生から構成されている。そのうちのフィリピン人と日本人は、悪戦苦闘しながらポルトガル語とテトゥン語を学び、敢えて「外国人」として東ティモールの教壇に立っている。それは何のためであろうか。

それはおそらく「挑戦」のためであろう。東ティモールの事情については当然ティモール人が精通している。しかし、ティモール人だけの共同体であれば東ティモールが置かれた社会的現実を、変えることのできない「所与」としてのみ受け止めてしまいがちになる可能性がある。外国人とティモール人とが協力することにより、はじめて「所与」を相対化して「挑戦」へと進む発想をもつことができる。その様な発想をもつことができる限りにおいて、イエズス会のような修道会は教区のカトリック学校ともひと味違うエネルギーの源となりうるのではないかと考えられる。浦師自身は中学高等学校（現時点では中学校）の教員であるにもかかわらず、敢えて貧しい地域の小学校が抱える問題を引き受けて、これに真正面から向き合っておられる。わずか 1 週間の滞在であるにも関わらず、筆者が【8】節で展開したようなことがらについて考えるようになるきっかけを与えてくれたのも「ウルメラ・プロジェクト」のおかげである。

筆者にとって浦師は師が日本におられた時からの知己である。師が福岡泰星学園（現、上智福岡）に勤務されていた折に、同校と師との教育実践を見学させていただいたこともある。現在の日本イエズス会はけっして潤沢な人材を有しているわけではない。筆者が

*¹⁹ 先に引用した前掲註 5 の HP。

栄光学園の生徒であった40数年前には、各期ごとに専属のイエズス会員の先生が配置され、他にも多数のイエズス会員の先生－何故か理科の先生が多かった－がおられた。しかし、現在のイエズス会学校には1校に1人か2人のイエズス会員が－大抵は「理事長」などの立場で－おられるだけである。そのような状況の中で、筆者は比較的若手の浦師はやがて日本におけるイエズス会中学高等学校4校の中核を背負って立つ人となるであろうと目していた。しかしイエズス会は、そのいわば「虎の子」である浦師を敢えて東ティモールに派遣した。その真意については外部にいる者には窺い知ることはできないが、この事実はイエズス会が「挑戦」の修道会であることを示していることだけは確かである。「Ad maiorem Dei gloriam 神のより大きな栄光のために」というのがイエズス会のよく知られたモットーである。

The Challenge of the Catholic Humanistic Education in Timor-Leste —— The Activity of Colégio Santo Inácio de Loiola ——

Naoki KUWABARA

I visited Colégio Santo Inácio de Loiola, a Jesuit high school in Timor-Leste, with Prof. Hidefusa Natsuaki Kokugakuin University (sociology of education). This report is the survey of the visit.

As the general problems in the education of this country, two points can be pointed out, i.e. the difficulty in the primary and the secondary education and the problem of the state policy on language.

The working languages in Timor-Leste are Tetum, English and Bahasa Indonesia. The government is promoting the use of Portuguese as the official language. However, there are few teachers, students, pupils who can understand Portuguese. The excessive burden of the language education causes the lack of the ability in the basic learning, especially that of the natural science and mathematics.

The central problem of the primary and the secondary education is the maintenance of the infrastructure, i.e. textbooks, classrooms, and the facilities. Especially in public schools, school hours are absolutely insufficient because of “the instruction in two shifts”.

The Catholic schools are free from the problem of “the instruction in two shifts” and ensure the environment for the substantial education. In the future, Catholic schools are expected to produce students with enough ability in the basic learning that can support the future of this country. But there is a limit in the Catholic schools. Because the Catholic schools are private schools, it is hard to accept students from any other social class than from the social class whose income are above a certain level.

The Colégio Santo Inácio de Loiola is going to challenge this limit that usual Catholic schools are confronted with by “the Ulmera project”. The Colégio Santo Inácio de Loiola promotes to let the children of the home village Ulmera who are difficult to enter this school because of the various reasons, e.g. the lack of the interest for the education of their parents, the low level of the education in the public school of the village, poverty of their family which cannot pay school expenses. The Colégio Santo Inácio de Loiola gives the free special class for entrance examination to students who hope to enter this school. The Colégio Santo Inácio de Loiola also provides the children who cannot pay the tuition for an economic reason with a scholarship.

“The Ulmera project” shows that Society of Jesus is a monastic order of “the challenge”.

The characteristic of monastic orders, especially of the Society of Jesus is “the multi-nationality”. The Jesuit group of teachers of the Colégio Santo Inácio de Loiola consists of the Filipino principal, the Japanese director and seminarian, Portuguese and the Timorese seminarians. Among them, the Japanese and the Filipino struggles desperately to learn Portuguese and Tetum and daringly teach as “a foreigner” in Timor-Leste. This fact shows their spirit for “the challenge”. Of course, Timorese people are well versed in the circumstances of Timor-Leste. However, the community consisting of only Timorese is apt to accept the social reality that Timor-Leste was put into only as “the destiny” that cannot be changed. However, if the Timorese cooperate with foreigners, they can have an idea of changing the reality of Timor-Leste, and can advance to “the challenge”.

We watched “the spirit of challenge” of the Jesuits of the present days in the activity of the Colégio Santo Inácio de Loiola.